

池田環境社会学の揺籃 : 3人の指導教員との関わりを通して

著者	中筋 直哉
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	69
号	4
ページ	119-133
発行年	2023-03
URL	http://doi.org/10.15002/00026524

池田環境社会学の揺籃

—— 3人の指導教員との関わりを通して ——

中 筋 直 哉

1. 問題の所在

この研究ノートは、今春定年退職される池田寛二先生のご研究の記念として、2回にわたる先生へのインタビューを踏まえて、先生のご研究の「揺籃」（後述）を探究するものである。またそれを通して、富永健一（1931-2019）のいう「戦後日本の社会学」（富永，2004）の別の側面をも照らし出したい。

池田（以下、敬称略）の環境社会学は、大まかにいえば農村社会学を独自に発展・展開させた、日本の環境社会学の創業世代のなかでもとくにユニークなものである（池田編著，2006）。農村社会学を発展させた環境社会学としては鳥越皓之の「生活環境主義」（鳥越，1997）があるが、池田の環境社会学はそれとはまったく異なる。では福武直（1917-1989）や蓮見音彦（1933-2022）に代表される戦後日本の農村社会学の主流（蓮見，1987）に棹差すものかということ、そうでもない。池田の環境社会学は理論的にきわめて「リベラル」⁽¹⁾かつ国際的な視野を持っている。主流の末端に連なる筆者にとってそれは長く謎だった。

あるとき池田から、学部の指導教員は越智昇、修士課程の指導教員（教官）は大塩俊介、博士課程の指導教員（教官）は古屋野正伍だったと聞き、謎を解く鍵を見出したような気がした。3人について筆者は詳しくなかったが、皆ユニークな学者だったことくらいは知っており、3人に学んだ池田がまたユニークであることは当然のように思われた。そこで謎を解くために、池田に大学院生時代の3人の指導と交流について語ってもらうことにしたのである。

ところが実際に話を聞いてみると、私の予想を大きく超えて、それは「戦後日本の社会学」の偶像を完全に破砕するものだった。「戦後日本の社会学」史に関する専門書が富永のものしかない現在、その乗り越えと学史の再構築はきわめて重要な課題である。しかし学史の専門家でない筆者にそれを正確に行うことはできない。一方で池田の語りをそのまま資料として記録・刊行することも（それ自体は今後行っていく予定であるが）、聞き手である筆者の問題関心（による限界）を見えなくしてしまう。

そこで本論は論文でなく研究ノートとして、学史上の重要性にも触れつつも、まずは池田の語りを通して池田環境社会学の「揺籃」を探究することに焦点を絞りたい。

なお、2回あわせて4時間にわたる池田へのインタビューには、東京都立大学大学院の後輩で、

農村社会学に詳しい辻井敦大氏に同席してもらった。池田たちが創始したユニークな学術雑誌『社会学論考』の編集に関わっている辻井氏の話では、今やそれは存続の危機にあるという。そうした意味でも辻井氏に同席してもらったことには深い意義があったと思う。

2. 方法論上の覚書

かつて筆者は磯村英一（1903-1997）の都市社会学を回顧する際、方法論上の用語として「揺籃」を提案した（中筋, 1998）。川合隆男の「学問運動」という用語に導かれて、磯村のようにユニークかつダイナミックな学者の学問を理解するためには、学者として成熟した後に書かれた著作、論文ではなく、青年期とくに学生時代の研究に限定されない多様な活動を見直し、評価すべきであるという意味を含ませた用語である。本論でもそれと同様に、池田の大学院生時代の師弟関係や同僚関係を、彼の環境社会学の「揺籃」として探究していきたい。

さらに本論では論点を2つ付け加えたい。

1つはこの「揺籃」の方法は、書かれたもののみを価値あるものとする、悪い意味での文献史学への「対抗」の意味をも含むことである。もちろん書かれたものならではの意味（への開かれ）や、思い出話や打ち明け話による歴史の捏造、すり替えの危険には十分注意しなければならないが、とくに社会学のように教科書的な統一見解の構築を目的としない「学問運動」の歴史を考える上では、著作や論文より学者たちの活動と交流を重視することが望ましい。その意味で、本論が試みるのは学説史ではなく学問運動史である。

もう1つは、学者たちの活動と交流にとってタイミングと持続が重要だということである。学者たちがいつ出会い、どれだけの期間一緒に活動したか、どのような交流を重ねたかは、時計と暦が示す客観的な継起としては捉えきれない一方、学者個人の「生きられた時間」（現象学的に反省された時間）の集積としても捉えきれず、集合的な時間としてはじめて理解できる。ただしそれは「共同体の時間」ではない。端的に言って、教師の時間と学生の時間は速度も密度も終着点も異なるが、両者はコミュニケーションにおいて交差し、交流する。つまりそれは「社会の時間」なのである。「揺籃」を理解する際、出会いのタイミングの微妙さを客観的な時系列に沿って同定しつつ、その後の交流の速度、密度を客観的な継起に貧困化しないように見ていかなければならない⁽²⁾。

3. 横浜市立大学文理学部での学士課程と越智昇

池田は1952年に長野県阿智村（当時は会地村）に生まれ、県立飯田高校を経て1971年に横浜市立大学に入学した。当時公立大学は授業料が格段に安く、親に負担をかけずに済むことが横浜市立大学を選んだ理由だった。また横浜市立大学は、高校時代に読んだ、学生運動家の日常を記録した奥浩平『青春の墓標』（奥, 1965）の著者、奥の母校でもあった。社会学を学ぶことも研究者になることも入学時点ではまったく考えていなかった。入学後1年は学生運動に関わったが、2年生

の時に社会学担当の越智昇（1924-2004）から直接入ゼミを勧められて、その後は社会学にのめりこむことになる。

ここで注意すべきなのは、当時の横浜市立大学文理学部のユニークさである。文理学部の起源の1つは第二次世界大戦後科学史家の三枝博音（1892-1963）を中心として設立、運営された、官の制度によらない自由な学校「鎌倉アカデミア」であり（前川，1996），池田が入学した当時はまだその余韻を残していた。たとえば池田は国文学の教員だった西郷信綱（1916-2008，池田が入学した年に定年退職，越智と親しかったという）から「アカデミア」の思い出話，たとえば教員の1人だった田辺寿利（1894-1962）のことを聞いたという。他にも日本史の今井清一（1924-2020）など，その分野を代表する，しかし旧帝国大学の学閥にとらわれない教員を多数擁し，学生たちはそのなかからゼミを選んでいた。教員同士，学生同士，教員と学生の交流についても，学生叛乱の火中にあっても「アカデミア」以来の伝統をつないでいたようである。越智が祖宗の地にある愛媛大学から横浜市大に異動してきたのは1968年で，その後の数年間は学生叛乱の火中だったから，池田は，ようやく落ち着いてきたキャンパスで越智がはじめて手塩にかけて育てた学生だったことになる。

越智が上京を決意したのは神島二郎（1918-1998）との共同研究に参加するためで，またすでに東京大学新聞研究所（当時）への内地留学を通して日高六郎（1917-2018）や稲葉三千男（1927-2002）など日本新聞学会の学者たちとの親密な関係を築いていた。

ここで筆者は立ち止まる。筆者が越智を知ったのは都市社会学者としてであって，マスコミュニケーション学者としてではなかった。大阪谷町の地域集団研究（越智，1980）は実証的，歴史的，かつマルクス主義の（悪）影響がないというユニークなもので，越智は代表作や学派を持ってはいないものの，後世代の都市社会学者から仰ぎ見られる存在だった（筆者は仰ぎ見ていただけで親しく話したことがない）。しかし横浜市大に異動するまでの（してからも）越智は，地元の地域社会調査も行っているものの，コミュニケーション論を中心とする理論社会学者だったのである。さらに越智の経歴を遡ると，社会学の専門的訓練をまったく受けていなかったことが分かる。大東文化学院（現大東文化大学）から学徒出陣し，旧満洲から命からがら復員後京都帝国大学文学部哲学科に編入学して，西田幾多郎（1870-1945）の高弟である山内得立（1890-1982）に学んだ。次いで桑原武夫（1904-1988）率いる人文科学研究所で助手を務めていた間に（おそらく2歳年上の作田啓一（1922-2016）や多田道太郎（1924-2007）らとの交流を通して）社会学に関心をもったようである。愛媛大学赴任時の担当科目は西洋哲学および社会学だった。また作田らとの交流の先に東大新聞研究所への内地留学があったようであり，後に越智は第一の師は山内，第二の師は日高と言っている（越智昇先生追悼集編集委員会，2006）。こうした経歴は，社会学の職業的訓練が確立した現在からはやや怪しげに見えるが，戦前までの社会学の規模の小ささからすれば当然のことであり（東京帝国大学法学部政治学科の吉野作造（1878-1933）門下の新明正道（1898-1984）も同様で，逆に「社会学青年」清水幾太郎（1907-1988）や福武直（1917-1989）の方が例外である），逆に越智の研究や学生の指導に柔軟さをもたらしたのではないだろうか。池田がそうした越智の指導を受けたのは実に幸福な出合いだったと言えるだろう。

越智の下で池田はコミュニケーション論を中心にした理論的な研究を身につけていく。ゼミではパーソンズの『行為の総合理論を求めて』（1951）の原書を「青焼きコピー」で講読した。一方できだみの『にっぽん部落』（1967）や大牟羅良の『ものいわぬ農民』（1958）など、ルポルタージュ的なものも取り上げた⁽³⁾。

さて、当時の横浜市大文理学部には大学院がなく（そのことは越智はじめ熱心な教員たちにとって非常に残念なことだった）、池田は外の大学院を目指すことになる。受験先の指示は特になかったので色々受験してみたそうで、東京都立大学に合格したことを報告すると、理論的な指導という点で、池田はまだ知らなかった大塩俊介（1923-2012）を勧められたという。

ここでも筆者は立ち止まる。当時の東京都立大学にはすでに河村望（1931-2015）が着任していたから、筆者は、池田は河村門下だと思い込んでいた。ここには深掘りすべき論点が2つある。1つめは現在の「准」教授と異なり、「助」教授は博士後期課程の指導が制度上行えず（事実上行っていたことはあっても）、研究者養成という点で越智が河村を勧める可能性は小さかったことである。もう1つは越智からコミュニケーション論を学んだ池田の指導教員としては、将来を考えても強固なマルクス主義社会学者の河村ではなく、リベラルな理論家として知られていた大塩が望ましい、と越智が判断したであろうことである。おそらく越智は新聞学会などで大塩と親しかったのだろう⁽⁴⁾。

ここまでの記述でさらに深掘りすべき論点を2つ挙げておきたい。

1つめは池田の大学進学の原因についてである。横浜市立大学志望の理由の1つは学生運動への憧れだった。これは受験戦争が激化した時代、さらに偏差値振り分けを当然視する現在に育った者には容易に想像できないことである。逆に今でもそうであるように、高校生が大学を選ぶのはその大学が何学の研究センターであるからとか、有名な学者がいるから、では必ずしもない。富永健一ですら専門課程進学時に、哲学者だった父親に相談して社会学を選んでいるのである（富永、2011）。

もう1つは戦後25年経った時点でもまだ大学は混乱を引きずっていたが、逆にそれが自由な研究と教育を実現していた面もあったことである。越智が専門的な社会学の訓練を受けていなかったことは、けっして越智が社会学の素人だったことを意味しない。ただしこの点は後の検討にも通じる微妙な問題である。つまり旧制帝国大学を卒業していることがまだ大学教員とくに大学院指導の絶対的条件になっていて、それぞれの大学の教員組織においても、学生の指導、指導された学生自身の成長においても大きな意味を持っていたことである。旧制の権威主義的教育文化が完全に払拭されるのはおそらく戦後50年経った1990年代だろう。逆にそのあたりから、アメリカ発の現代的な研究教育制度が、留学帰りの教員たちによって急速に標準化されていくのである。

3. 東京都立大学大学院での修士課程と大塩俊介

池田は1976年に東京都立大学大学院に進学した。当初の指導教員（教官）は大塩俊介だった。

大塩は越智より1つ年上で（森岡清美と同年）で、旧制湘南中学から旧制東京高校に編入学し、東京帝国大学文学部社会学科から学徒出陣して海軍通信隊の少尉となった。復員後1947年に卒業し、同研究室の副手、助手、横浜国立大学講師を経て東京都立大学助教授に着任した。当時の東京都立大学人文学部社会学科は事実上文化（社会）人類学科で、主任教授は岡正雄（1898-1982、ただし岡も東大社会学科卒）、3人の助手は住谷一彦（1925-）、祖父江孝男（1926-2012）、蒲生正男（1927-1981）だった。学科を挙げて行われた伊豆地方の漁村調査は、後の九学会の辺境、離島調査と同じく渋澤敬三（1896-1963）の漁村研究を継承しつつ、植民地を失い、海外渡航を制限された時代の文化人類学の生き残りを賭けたものだったろう（鈴木編、1956）。もっとも岡は社会学との共存共栄に腐心していたようであり、大塩はそれらの研究に積極的に参加した。とくに計量的な社会調査の企画実施の面で貢献したようである。

ここで筆者はまた立ち止まる。大塩は計量社会学者だったのだろうか。都立大学時代の大塩の業績を見ると、たとえば日本の都市社会学の記念碑的研究である青砥団地調査（磯村・大塩、1958、1962）や東京四大盛り場調査（大塩・宮本・竹中、1961）をはじめ計量研究が多い。しかし、実は大塩は戸田貞三（1887-1955）と林恵海（1895-1985）が創り上げてきた東大社会学科の社会調査中心主義から離れて（彼らの後継者たる尾高邦雄（1908-1993）、福武がいずれも理論から調査に転向したことに注意）、純粹理論的な社会学の可能性を模索していた。『社会学評論』創刊号に掲載された事実上のデビュー論文（大塩、1950）は、アインシュタイン以後の理論物理学の進展を受けた科学哲学を踏まえた社会学、社会科学の再編成という、きわめて野心的な企図をもつ長大なものだった。まだパーソンズやマートンが紹介される前（フランクフルト学派の紹介もまだ）にデュルケム、ウェーバー、ジンメルの祖述でない理論構築に取り組む困難さは、現代の私たちにはほとんど想像することができない（大塩は同時代的に彼らの論文を読んでいたと回顧している（尾形・池田、1989））。逆に言うと、パーソンズやマートンが導入された後に、それらに依らない大塩の企図は時代遅れになってしまったのかもしれない。彼が理論と調査の結び目として選択したK.レヴィンとその継承者であるJ.L.モレノのソシオメトリーも、青砥団地調査以降ほとんど後代に継承されなかった。さらに赴任当初の大塩は、大学院設置のために大阪大学から異動してきた小山隆（1900-1983）、続いて東京都の幹部職員から転職してきた磯村英一、さらに卒業同期で東京教育大学から移ってきた岩井弘融（1919-2010）といった実証研究者ばかりの陣容の中にあっては、最新の理論研究と最新の社会調査を一手に引き受けざるを得ない位置にあった⁵⁾。

ところで池田と同期で大学院に入学したのは、河村望門下となった寺田良一と倉沢進（1934-2019）門下となった園部雅久だった。いずれも後に池田と並んで環境社会学、都市社会学の中心的研究者になっていく人びとである。また、このように助教授であっても研究者養成に実質的に関わっていたのだから、池田が大塩の指導を受けたのは、やはり越智の勧めが大きかったと言わなければならない。

池田は大塩の下で引き続きコミュニケーション論を研究していたが、修士論文提出間際になって大塩から新設されたばかりの筑波大学への異動を突然告げられた。そのため「価値意識（見田宗介

(1937-2021) に影響されての) とコミュニケーション」をテーマとする修士論文は、指導を引き継ぐことになる古屋野正伍 (1916-2011) と助教授の河村望が副査として審査することになった。結局池田は大塩の指導を細かく受けたことはなかったという。ただそれは師事する時間が短かったからではなく、大塩自身が細かく指導する人ではなかったからのようだ。修士論文は自由に書くことを許されたが、講義やゼミでの大塩の議論は新鮮でなく、これが「大塩社会学である」といった感じを受けることもなかったという。池田も指摘する通り、第二次世界大戦後の社会学界に鮮烈にデビューした大塩の50歳前後の姿は、やや早過ぎる研究者人生の老化を見せていたと言わざるを得ない。

ただし、大塩門下の先輩で同志社大学出身の岡元行雄 (修了後筑波大学に技官として採用された。なお四大盛り場調査に同行した竹中和郎も同志社出身) に誘われて、大塩が主宰する鹿島臨海工業地帯の (旧) 住友金属の社宅調査に同行した。また同じく先輩で津田塾大学出身の菅谷よし子らとパーソンズ『社会的行為の構造』(1937) の原書の読書会を行った。そうした多様な研究の結び目として大塩の存在とゼミがあったようである。

一方、河村が同じパーソンズの『社会類型』(1966) を講読するゼミや、倉沢の都市社会学のゼミにも出席したという。このように学生も教員も、狭い師弟関係を越えて多様かつフラットにつながる場が実現していたという。さらに河村ゼミの先輩の片桐雅隆が主導するシュッツの読書会に参加したり、文化人類学の助手の大塚和夫の研究会に参加したりというように、先輩後輩あるいは社会学と文化人類学との敷居も低かったようである。とくに文化人類学の助手や院生との交流が後の池田の国際的研究活動に活かされるのである。

ここで筆者はまた立ち止まる。筆者はかつて磯村の東京都幹部職員から都立大学教官への転職 (1953年) について、文化人類学側の強い反対があったものと推測していた (中筋, 2008)。とくに有名なのは、磯村は学内に研究室を与えられず、東京市政会館に与えられた個人研究室で仕事を続けたという伝説である。私の推測の根拠は磯村の第一作『都市社会学』(1953, 有斐閣) に対する文化人類学の助教授鈴木二郎 (1916-1980) の激烈な批判書評だった。しかし池田の印象ではそうしたことはなく、むしろ人文学部教授会のなかに磯村を強く拒否する一派があったのではないかということであった。この点は正確な考証が必要であろう。その際、鈴木が磯村と同じく被差別部落問題研究に深く関わったことも考慮されるべきだろう。

こうした院生や助手たちのフラットな研究交流は学外にまでつながっていた。都立大側のつなぎ手は片桐であり、早稲田の西原和久や慶應の藤田弘夫、吉原直樹らとつながり、また片桐の大阪市立大学就職に連れて大阪大学の浜日出夫らともつながっていったという。また事実上東京都立大出身者限定だった助手採用を学外に開くことになり、東大から江原由美子が着任した。後世代から見ると、まさに日本の現象学的社会学の誕生の瞬間に池田は立ち会っていたことになる。

ここで筆者はまた立ち止まる。後世代から見ると学生叛乱後の大学は沈滞していたように思われるが、そうではなく、ちょうど河村や倉沢のような戦後教育の第一世代 (都市社会学では第二世代という (中筋, 2008)) が研究、教育ともに一番生産的な時期にさしかかっており、一方で学生叛

乱の「果実」としてフラットな研究室運営、学生教員関係が実現していたのである。そのなかで新しい社会学の潮流が模索されていったのではないだろうか。そしてその潮流が1990年代から2010年代くらいまでの日本の社会学の主流へと成長していったといえるのではないだろうか。

池田の語りのなかで筆者がとくに興味深く感じたのは、そうした研究交流の「具体的な場」についてである。大学構内の教室、研究室よりも繁華街の喫茶店や院生、助手自身の下宿、自宅での開催が多かったそうである。こうした親密性を含んだ公共圏の成立は、競争と政治から逃れられない私たちの業界にそれだけではない確かなネットワークを生み出したのではないだろうか。もちろん池田が強調したように、それは馴れ合いの「オトモダチ」ではなく、信頼に支えられた互いの研究への厳しい批判を伴うものだった。逆にそうした公共圏が貧弱な「場」では、(当時も今も)私たちは競争と政治だけに振り回されて、結局は支配被支配関係か孤立かしかない研究者人生を生きるを得ないのではないだろうか。池田は、当時の東大や京大の大学院生はこうしたネットワークの中にあまり入ってこなかったという。筆者はその世代ではないが、少なくとも東大では師弟関係や学内の研究会での先輩後輩関係が強く、逆に外とのつながりは(東大の研究会にわざわざ出かけてきてくれる人は別として)強くなかったように思う。

池田の語りを聞きながら、筆者は有賀喜左衛門(1897-1979)の「同族と組」の議論を思い出していた(有賀, 1971)。有賀は支配被支配関係の強い家関係を「同族」、フラットな家関係を「組」と呼び、両者は外部の社会経済環境に応じて危機には同族、平時には組という風に循環すると論じた。福武直はそれを「同族構造」から「講組構造」へとといった社会発展図式へと読み替えた(福武, 1976)。これらを当てはめると、池田が東京都立大学で学んだ時代には、大学のマス化に伴う学生叛乱を経て、日本の大学は帝国大学を頂点とする「同族構造」が破綻し、その焼け跡に「講組構造」的な研究ネットワークが簇生していったといえよう。しかし一部の帝国大学では依然として「同族構造」が封建遺制のように残存していた(危機だから?)。もちろん同じ東大でも、教養学部の折原浩(1935-)や見田宗介は師弟関係や狭義の社会学を超えた研究ネットワークを形成していた。また文学部社会学科でも、まだ大学に属していなかった橋爪大三郎を中心とする「言語研究会」の活動が盛んだった。しかしそれらが、池田が経験したようなフラットな交流を広げていき、後々までもフラットな交流を続けたかという点、その最後尾に属する筆者の体験として、それはなかったと言わざるを得ない。新しい「講組構造」のなかで生き生きと成長した池田と、古い「同族構造」の断末魔の声に囚われていた筆者のちがいを、池田の語りからしみじみと感じた次第である。

話を戻そう。大塩の筑波大学への異動は、池田の印象では望んでのことという印象ではなかったという。この件について、これも池田が中心になってまとめた『大塩俊介先生 人と業績』(尾形・池田編, 1989)において、河村望が招いた側(というより仲介した人)を露骨に下品な表現で批判しているが、事実レベルで「河村語」を翻訳するなら、伝統ある東京教育大学の廃校と入れ替わりに政府と文部省(当時)の力で「新設」された筑波大学のなかで、人文系とくに社会学は東京教育大学時代の負の遺産(筑波移転に対する強硬な反対派だった(森岡, 2012))を拭い去り、他の分野同様に博士を量産できる一貫制大学院を設置することが容易でなく、またそれを実現するために

文部省に許容される教官採用が必須で、それを行えた「強力な仲介人」に大塩は従う他なかったということだろう。筆者はいくつかの状況証拠からそれが誰かはっきりと推測することができるが、しかしそれは推測に過ぎない。ちなみに現在有力な社会学の研究センターの1つである筑波大学社会学研究室が安定期に入るまでの苦心は、同研究室の紀要『社会学ジャーナル』に詳しい。いずれにせよ大塩は池田の前から去り、池田は学生叛乱後東洋大学に転出した岩井の後任として東京女子大学から着任していた古屋野正伍（1916-2011）の門下に移ることになる（なお大塩と前後して筑波大学に東京女子大学から異動したのが副田義也（1934-2021）である）。

池田と大塩の関係は、大塩が定年を待たずに千葉大学文学部社会学科に異動したところへ、池田が兵庫教育大学から異動してきて再び結ばれることになる。2つの人事には中野卓（1920-2014、中野は旧東京教育大学社会学研究室を森岡清美と担っていた）が関わっていた。定年退官する中野が自分の後任としてかつて自分の後任の助手だった大塩を推し、筑波から救ったのではないかと、河村は前記の記事に記している。また中野は池田が国立大学助手から国立大学助手への異動であることを気遣って、代替りのポストを探そうと提案してくれたそうである。千葉大学で大塩は池田の協力を得て社会調査実習（以後千葉大学社会学科の名物となった）を運営する一方、定年退官後日本大学文理学部に、池田が同大学農獣医学部（当時）に異動してからも、官庁からの委託研究、たとえば文化庁より委託された伝統的建造物保存地区の調査に池田を誘い続けた。そうした意味で大塩は池田に社会調査の「場」をつねに与え続けたといえるだろう。もっとも大塩自身はそうした調査研究の成果を論文や本にまとめることはなかった。

現在の池田から見ると、大塩はあまりに若くして高いレベルに到達してしまった後、共同研究や校務の調整的役割に追われて研究者としての個性を出せずに終わったように思われるとのことである。一方で学生の面倒は非常にいていねいに見てくれるよい人柄の方だったそうである。

4. 東京都立大学での博士後期課程、兵庫教育大学での助手時代と古屋野正伍

古屋野正伍は、この研究ノートに登場する池田の3人の指導教員（教官）のうちでは最年長である。池田が指導を受け始めたとき古屋野は57歳で、定年退職に近づいていた。古屋野を勧めたのは大塩だったという。これは一見奇異だが、池田の理解では、すでに修士課程で東京都立大学都市研究センターによる多摩ニュータウン調査（後述）に参加していて、その主催者であり、東京都立大学赴任後つねに都市研究センターの運営に心を砕いてきた古屋野に知ってもらっていたことも大きかっただろうとのことである。もちろん大塩もこの調査に参加している。大塩の方は小笠原諸島復帰（1968年）後の東京都立大学小笠原研究委員会の運営にも関わっていて、池田を連れて小笠原で社会調査を行った（大塩・池田、1978）。もう1点、倉沢進の記念碑的労作である『東京の社会地図』（1986、東京大学出版会）の初期のデータ集めのために、池田は倉沢と2人で区役所回りをしたそうである。このように学部以来の理論研究を進めながらも、指導教員と大学より与えられた社会調査の機会を通して、池田はフィールドワーカーの素質を開花させていく。

古屋野の指導のなかで池田にとってとくに印象に残っている言葉は、「修士までは学生だが、博士後期課程は研究者だから自分のやりたい研究をとことんやりなさい」だった。その言葉のままに池田は理論研究を続けつつ、さまざまな社会調査の経験を積んでいったのである。

なかでも筆者が注目するのは、都市研究センターによる多摩ニュータウンの調査研究である。古屋野が主宰し、高橋和宏、江原由美子両助手のコーディネートの下にまとめられた論文は（高橋他、1980）、上記の言葉通り、古屋野の与えた舞台の上で節ごとに執筆者の若々しい個性が踊っているが、とくに池田の担当部分は、大塩から高橋に受け継がれていたレヴィン＝モレノ流のソシオメトリーにさらに数学のグラフ理論的な要素を盛り込もうとしており、後の森岡清志らのパーソナルネットワーク研究の先駆ともいべきものだった。付け加えれば、池田も回顧するように（後世代の筆者も体験したが）、当時の大学の計算機環境は今からは想像もできない貧弱さで、（理工系のある都立大でも大型計算機と銘打ってはいたが）、後の兵庫教育大学時代は京都大学まで通ったという（池田は FORTRAN、中筋は SPSS や SAS だったが、1行ずつ入力したプログラムのエラーを計算結果から探し出す苦勞を、池田と筆者は共有している）。

もう1点、この時期の池田の活躍で見落とせないのは、『社会学論考』の創刊（1980年）である。それは東大の院生たちが創刊した『ソシオロギス』（1977年）に刺激を受けたものだったという。当時東大（池田が挙げたのは文学部社会学科ではなく新聞研究所の竹内郁郎）から東京都立大学の非常勤に委嘱されていた教官は東大での演習に参加させることで東京都立大学まで出校する手間を省いていた。結果院生たちは東大に出向き、東大（新聞研究所、社会学 B コース（当時））の院生と交流することになる。そうした背景から『社会学論考』が構想されたのである。

しかし教官への対抗意識を強く出し、自主財源で運営された『ソシオロギス』に対して、『社会学論考』は院生教員のフラットな交流に支えられつつ、研究室予算で運営されることになった。その勞をとったのは倉沢進だったという。その結果、院生中心ではあるが教員（磯村英一でさえも）も投稿するという、これまたフラットな形態が実現した。こうして池田や片桐、桜井厚らの尽力で創刊された『社会学論考』の巻頭を池田の論文が飾ることになったのである（池田、1980）。さらに、鳥越皓之らの『水と人の環境史』（1985、有斐閣）の刊行に呼応する学内シンポジウムを桜井厚と企画し、その成果も論文として『社会学論考』に掲載したという。このあたりからいよいよ環境社会学者としての池田が出立してくる。

話を戻して古屋野の経歴をみると、古屋野は1916年（大正五年＝しょうご）岡山県旧倉敷市長の息子として生まれ、旧制六高で福武直と同期だったが福武と異なり、東京帝国大学文学部社会学科ではなく経済学部商学科に進んだ。そして卒業後は社会に出て社員を務めていたという。兵役にも就かなかったようで、第二次世界大戦後は高等女学校の英語教師から岡山師範学校教授、学制改革で岡山大学助教授となったところで、第1期のフルブライト留学生に応募してミシガン大学に留学し、そこで社会学を学んだ。帰国後岡山大学に引き続き勤めた後、東京女子大学へ異動して上京してきたのである（古屋野正伍先生喜寿記念誌編集委員会、1993）。

ここで筆者はまた立ち止まる。疑問の1つめは古屋野が1937年に東京帝国大学経済学部にて在学

した頃、そこは「河合栄治郎事件（平賀肅学）」（1939年）の火中だったことである（竹内, 2001）⁶。商学科教授だった河合（1891-1944）を「裏切った」一番弟子の大河内一男（1905-1984）の忠実なゼミ生だったのは、古屋野と同年（ただし進学時に病気で1年休学しているので1学年下で卒業）の隅谷三喜男（1916-2003）である（隅谷, 2000）。そのとき古屋野は帝国大学の混乱を目の当たりにしたはずである。しかし古屋野はそれについて一切語っていない。また卒業後の会社員生活や兵役に就かなかったことについても語っていない。池田の回顧によれば、古屋野はそもそも自分や家庭のことを語らない人だったそうである。

2つめは、アメリカ留学の際経済学や経営学ではなく社会学を選んだこと、それもコロンビアやシカゴではなくミシガンを選んだ理由が分からない。池田も聞いていないという。後代の目からは、シカゴから派生しつつそこは異なる社会学の研究センターに成長しつつあったミシガンを選ぶのは理解できるが、きわめて情報の限られた同時代に選べた理由が分からないのである。いずれにせよ留学先から認められたのだろう、古屋野は帰国後もミシガンの日本研究プロジェクトの現地窓口を務めた。そのファンドを利用して実施された、名古屋大学医学部精神科教授村松常雄（村松剛・英子の父）の主宰する『日本人—文化とパーソナリティの実証研究』（1962, 黎明書房）に、宮本常一（1907-1981）とともに地域班として参加した。ちなみにこの調査で事務局を務めたのは、当時大学院生だった中田実である。古屋野が岡山でこの調査を実施している真横で、福武直は『日本農村社会の構造分析』（1954, 東京大学出版会）の調査を農林省の小倉武一（1910-2002）と行っていた。その後古屋野は、おそらく旧友福武の依頼だろうが、諸般の事情から教員が大学院出たての蓮見音彦1人になっていた東京女子大学社会学研究室に異動してきた（1961年）。もっとも蓮見に教わった筆者は、当時の古屋野の印象を聞いたことがない（聞かなかったからかもしれないが）。そして先述したように、東洋大学に転出した1年年下の岩井を襲って、57歳で東京都立大学に異動した（1973年）。

さて、古屋野が池田の研究者人生にさらに影響を及ぼしたのは、東京都立大学を退官後、池田を連れて兵庫教育大学に異動したことである（1980年）。兵庫教育大学はいわゆる「新々大」（旧師範学校系の教育学部に対して、筑波大学以下文部省が支配を強めるために新設した教育学系単科大学、現場教員の再教育を目的としていた）の1つで、古屋野が赴任したのは大学設置基準をクリアするためだったろうが、赴任後は研究室をしばしば空けて海外や国内の調査研究に没頭した。神戸や姫路など大都市から遠い農村部に新設された大学の同僚として古屋野を選んだのは、プリンストン大学で学位を得た佐々木正道であり、助手の池田にも就職の場所は問わないか確かめてから採用を進めたという。一方池田の就職を聞いた越智は否定的な反応だったという。実際、採用1年目は研究助手ではなく技官身分だった。

就職後、池田は古屋野の留守を預かりながら、農村の真中に立地する大学の周辺の農村の水利慣行（ため池利用）や共有林野の管理といった、農村社会学から環境社会学へと展開する研究テーマを自分の目と足で開拓していくことになるのである。もちろん古屋野の主宰する吉備高原テクノポリス調査なども池田のフィールド経験を増やした。ただし古屋野の国際調査に同行したことはない

という。当時は助手が国際的な調査研究費を使えることは稀であったとのことである。

また池田は古屋野の代わりに学生の指導にも積極的に関わった。当時指導した学生に沖縄出身で沖縄の共同店の研究で知られる宮城能彦（沖縄大学）がいる。

一方、池田は師範学校、高等師範学校以来の古い気質を残した同僚たちから古屋野についての嫌味を言われることも多かったという。古屋野の方は海外の研究者の招聘にも積極的で、それは大学の対外的評価を高めたから、同僚たちのやっかみはますますひどくなったという。そうした環境を馴染めなかつただろう、古屋野は完成年度を待って、池田を残して名古屋商科大学へと去って行く。

古屋野の研究者としての個性を表す業績として池田がとくに注目するのは、1961年に『社会学評論』に載った「現代インドにおける社会変化とこれに対応する構造的視点—現代インド社会構造論序説」（古屋野、1961）である。「戦後日本の社会学」の鎖国的状況のなかではきわめて特異な論文で、「社会構造論」という点では福武の農村社会学に通じるが、内容は福武とはまったく異なる。また福武と研究上の関係があり、インドがフィールドだった中根千枝の『社会人類学』（1987、東京大学出版会）からも独立しており、その後の古屋野のアジア社会学の始まりに位置するものである。

ここで筆者はまた立ち止まる。疑問の1つは、大塩の論文も古屋野の論文も『社会学評論』の論文としては異常に大きく、現在の査読論文とはまったく異なることである。これは当時の『社会学評論』が依頼中心であり、依頼先も編集委員会の選考と合意に基づくものでは必ずしもなかったのではないだろうか。これは推測に過ぎないが、執筆者の教授昇進、異動、大学院設置審査に関わる場合に、必要業績として依頼したり、推薦したりして書かせるという慣行があったのではないだろうか。それを仕切っていたのは、やはり『社会学評論』の事実上の創業者である福武直だったのではないだろうか。

もう1点、古屋野が（中国ではなく）インドをはじめとするアジア比較社会学という研究テーマをなぜ選んだかということである。もし古屋野がこれまで述べたようにある種のカンを持った人であったなら、第二次世界大戦後のアメリカ社会学および文化人類学に比較社会学の大規模プロジェクトを実施する機運が高まっていたことに気づいていただろう。たとえばミシガンにいたC.ティリーにしても（池田は古屋野からティリーを借りたという）ハーバードのB.ムーア・ジュニアにしてもシカゴ時代のD.リースマンにしてもそうだったし、『須恵村』のJ.エンブリーも第二次世界大戦後にはタイを中心とする比較社会人類学へと研究を進めたのである。そうした潮流に古屋野はいち早く気づいていたために、同じ構造論でも、日本固有のマルクス主義社会科学の近傍で活動していた福武の「村落の構造分析」とはまったく似て非なるものとなったのではないだろうか。

逆にこうした古屋野の研究は、富永のいう「戦後日本の社会学」の主流に棹さず立場から見ると過度に帰納的な、というか無理論・無方法の調査報告書に見えるのだが、逆に池田のような若い門下生にとっては新しい研究の視野と機会は与えるが理論と方法は規制しないという、リベラルな育ちの場、若い学生の長所を壊めない場を提供していたと考えられるのである。

なお古屋野が文化人類学に親近感を示していたかということ、池田ではそうではなかったという。

古屋野が異動してきた当時の東京都立大学は、池田が経験したように社会学と文化人類学の垣根を越えた研究交流はあったものの、文化人類学側の学術雑誌『社会人類学』の活動に明らかなように、山口昌男（1931-2013）や川田順造（1934-）らによる構造人類学の受容期で、また文化人類学の他学からの組織上の自立期でもあった。だから古屋野は文化人類学に接近することなく比較社会学の方向で研究を展開していったのではないだろうか。

以上の論点は単なる組織上の挿話ではなく、「戦後日本の社会学」が、留学による西欧の最先端学説の輸入を乗り越えて、国際標準に沿って研究や複数の外国をフィールドとする研究といった文字通りの「国際社会学」を、どの時点ではじめ、広げたかという、学問のグローバリゼーションの問題に関わってくるのである。実際古屋野はISA（国際社会学会）の運営に主体的に関わった最初期の日本の社会学者だった。

もう1点、古屋野は国際調査研究の一方で東京都立大学以来金沢での地域社会調査を継続しており、それは青木秀男らの伝統職人調査に受け継がれていった（青木・近藤，2019）。池田の回顧では金沢大学の二宮哲雄（青木の学部時代の指導教官）と古屋野は親しかったという。池田によれば「海外、国内という分け方は古屋野の頭にはなかったのではないか」とのことである。なお注意すべきは、国際研究でも国内研究でも伝統的な生活と仕事の重なり合いへの関心が強かった点である。趣味の能を玄人はだしにまで極めたこととも関係するかもしれない。

以上の国内研究を一つにまとめるならばやはり都市社会学ということになるだろうが、古屋野は中村八朗（1924-2008、なお中村は東京都立大学では小山隆門下で筑波大学における大塩の後任）とともに「東京都市社会学研究会」を主宰し（1967年から）、奥田道大、倉沢進、高橋勇悦（1935-2021）らと研究を深めていた。国民生活センター編『現代日本のコミュニティ』（1975、川島書店）はその成果と言えよう。さらにこれが、鈴木廣（1931-1924）が提案した日本都市社会学会の母体の1つとなり、古屋野は創立大会を池田とともに兵庫教育大学で引き受けたのである。

大きく豊かな池田の「揺籃」を辿る旅も終わりに近づいてきたようである。千葉大学に異動した池田は、兵庫教育大時代の農村調査の経験を理論化すべく、『思想』にE.P.トムソンおよびJ.スコットの「モラル・エコノミー」に関する先駆的な論文を発表した（池田，1986）（この論文をいち早く批判したのは折原浩の高弟の1人でイギリス史家の近藤和彦だったという）。これは同僚の文化人類学者で、インドネシアを専門とする中村光男（1933-）（当時の千葉大文学部には中村の学生運動時代の「戦友」である加藤尚武（1937-）もいた。また歴史学科にはインド史の小谷汪之（1942-）や東欧史の南塚信吾（1942-）らユニークな歴史研究者もいて、池田は親しく交流したという）の紹介によるもので、インドネシアへの関心もそのころから深まっていった⁽⁷⁾。ただ人事上の争いから千葉大学で助教授に昇任することはできず、紹介を得て日本大学農獣医学部（当時）に転出し、さらに2004年、「社会学理論」担当教授として法政大学社会学部に招聘されたのである⁽⁸⁾。

最後に、これまでの旅を象徴する池田の言葉を記しておきたい。本学部に着任したとき、池田はカリキュラムが非常に不自由だと感じたそうである。

5. 結論

以上の池田環境社会学の「揺籃」を総括して、池田は「3先生の時代の社会学は自由だった」という。さらに言葉を継いで、「自分が関心をもって研究していることが社会学になる。社会学という学問は後からくる」という。残念ながら筆者はそうは思えない。筆者が学んだ「戦後日本の社会学」はまず社会学とくに社会学理論があり、その後、理論を探究し続ける能力のない者がフィールドやデータに「逃げる」というものだったからである。私は富永健一の決めゼリフを思い出す。「それは社会学じゃない!」。そうした筆者から見ると、池田の「揺籃」はまるで乳と蜜の流れる地だ。この落差はどのような構造的現実（両者の主観や性格を超えて）としてあったのだろうか。

まず挙げられるのは、大学教員が旧制大学出身者から新制大学出身者に切り替わる時期に、ちょうど学生叛乱があり、またそれを契機として大学院や研究費の制度化が進んだことである。そのなかで旧制のよい面と新制のよい面が重なればそこにリベラルな研究教育の場が出現し、旧制の悪い面と新制の悪い面が重なれば、そこに競争と支配被支配の研究教育の場が出現したということだろう。この2つの社会構造は一部に後者を「封建遺制」として残しつつも後者から前者へと構造変動していったのだろう。東京大学出版会が1970年代に刊行した緑色の装丁の『社会学講座』はその切り替わり点にあるものだったし、逆に1990年代に刊行した白いカバーを掛けた『講座社会学』はこの構造変動の終結（戦後の終焉）を示すものであっただろう。

筆者が属したりベラルでない側の弁護をするならば、やはり尾高邦雄が「独り負け」したとされる『社会学評論』1(4) (1951年)における尾高邦雄、新明正道、高田保馬の論争のトラウマが考えられる。そこで尾高は戦前世代の（誇大）理論家2人に実証的な立場から挑み、負けた（説得できなかった）。そのことが尾高自身を非理論家たらしめただけでなく、理論の支配に固執する東大社会学科の籠城作戦を帰結したのではないだろうか。しかし尾高を継ぐべき人びとは尾高の挑戦をさらに強力に推進し、他の研究拠点に開かれたフラットなネットワークを構築すべきだったのである。その現実的解答を、池田を育てた3人の旧帝大戦前世代の研究者たちは示していたのである。

より一般的に言うならば、大学院生の指導においては、唯我独尊的な理論を押しつけ、修道院的なゼミナールによって自らのエピゴーネンを量産することではなく、大学院生一人ひとりが自らの問題関心を自由に探究できる研究と調査の場を用意することが必要なものであり、またそうした院生同士が広くネットワークを構築することを支援するような学会や研究会などの組織を整えることが必要なのである⁹⁾。そうでなければ池田のようなユニークな社会学者を、日本の社会学は二度と生み出すことはないだろう。

注

1. ここでリベラルというのは、単一の思想や主義に先験的に固執しないことと、単一の理論や方法に先験的に固執しないことをいう。
2. 「社会の時間」という用語は、かつて用いた「社会の記憶」という用語に倣っている（中筋, 2005）以上

の論点の先にはなお深掘りすべき哲学的課題があるが、哲学に暗い筆者には今のところここまでしか検討できない。今後の課題としたい。

3. 越智が横浜市立大学で教え、後に社会学者となった人に早川洋行がいる。早川は池田と異なり大学院は中央大学に進んだ。指導教員の佐藤智雄（1917-2000）も越智と新聞学会で密接な関係があったという。池田と早川は中身こそ異なれ、理論社会学に基礎を置いた上で地域社会への実証研究も行えて、どちらもリベラルであるという点で、越智の学問を正しく受け継いでいるといえよう。
4. 以上のような学部時代の越智の学恩に応えるべく、池田は越智の死後追悼集『啐啄同時』（越智昇先生追悼集編集委員会編，2006）を編集した。
5. 池田は大塩が都市社会学，家族社会学，社会病理学といった実証的分野にも関心をもっていたと回顧するが、それは内在的なものではなくこうした同僚たちとの交流がもたらしたのではないだろうか。
6. 竹内が詳述するように、当時の経済学部は矢内原忠雄辞任（1937年），人民戦線事件（1938年），河合栄治郎事件（1939年）と大揺れに揺れていた。なお別の学科でも同じ時期に学生時代を過ごした福武直や日高六郎にとっても将来の職場である帝国大学の混乱は他人事ではなかったのではないだろうか。なお竹内の論旨は当時の混乱は1968年の混乱に通じるというもので、そのただ中で福武，日高，大塩，古屋野らは研究者人生の終末期を過ごすことになる。
7. ここにも明らかなように、池田はそれぞれの場所で組織のタテワリを越境した研究ネットワークを作ることがきわめて上手である。兵庫教育大学時代にも地元で地道な調査に基づいて山片蟠桃の伝記的研究を進めていた同僚の日本史家末中哲夫と親しくしていたという。
8. 日大在職時に教えた学生のなかで、大倉季久（現立教大学准教授）とは、池田が法政大学社会学部への学士入学を勧め、その後池田が法政大学に着任したとき、博士後期課程で再会し、指導するという奇縁があった。
9. 長いインタビューの最後に、池田はこれまで訪れてきたたくさんの調査地への愛着を語り、退職後は再訪問調査を行っていきたくてと語った。その成果を心待ちにしたい。

付記：この研究ノートは、筆者としては先の「福武直の選択—東京学派，社会学の場合」（中筋，2021）の続編である。前作では「戦後日本の社会学」を形成した福武直の選択の光と影を論じたが、このノートではさらにその裏側を覗き見たような気がした。おりしも本論執筆中、福武の後継者であるわが師蓮見音彦が亡くなった。彼は私に「戦後日本の社会学」の光も影もまったく継がせなかった。それは彼がその賞味期限を誰よりもよく知っていたからにちがいない。

文献

青木秀男・近藤敏雄，2019，『金沢象嵌職人の生活世界 - 都市旧中間層にみる〈民衆的近代〉』社会理論・動態研究所。

有賀喜左衛門，1971，「同族と親族」（初出1947）『有賀喜左衛門著作集X』未來社。

福武直，1976，『福武直著作集第4巻 日本農村の社会的性格』（初出1947）東京大学出版会。

蓮見音彦，1987，「戦後農村社会学の射程」『社会学評論』38(2)。

- 池田寛二, 1980, 「発話行為としての流言」『社会学論考』1.
- 池田寛二, 1988, 「モラル・エコノミーの射程—農業問題への歴史社会的視座」『思想』773.
- 池田寛二編著, 2006, 『地球環境問題の現場検証—インドネシアに見る社会と環境のダイナミズム』八千代出版.
- 磯村英一・大塩俊介, 1958, 『団地生活と住意識の形成』東京都立大学社会学研究室.
- 磯村英一・大塩俊介, 1962, 『団地生活と社会圏の形成』東京都立大学社会学研究室.
- 古屋野正伍, 1961, 「現代インドにおける社会変化とこれに対応する構造的な問題点—現代インド社会構造研究序説」『社会学評論』12(1).
- 古屋野正伍先生喜寿記念誌編集委員会, 1993, 『日本とアジアと世界と』同委員会.
- 前川清治, 1996, 『三枝博音と鎌倉アカデミア—学問と教育の理想を求めて』中公新書.
- 森岡清美, 2012, 『ある社会学者の自己形成—幾たびか嵐を越えて』ミネルヴァ書房.
- 中筋直哉, 1998, 「磯村都市社会学の揺籃—東京帝大セツルメントと戸田社会学」『日本都市社会学会年報』16.
- 中筋直哉, 2000, 「〈社会の記憶〉としての墓・霊園」片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社.
- 中筋直哉, 2008, 「日本の都市社会学—都市社会学の第一世代」高橋勇悦・菊池美代志・江上涉編『21世紀の都市社会学』学文社.
- 中筋直哉, 2021, 「福武直の選択—東京学派, 社会学の場合」『ブックレット東京学派2 社会学の中の東京学派』東京大学東洋文化研究所.
- 越智昇, 1980, 「地域組織の日本的構成」蓮見音彦・奥田道大編『地域社会論』有斐閣.
- 越智昇先生追悼編集委員会, 2006, 『啐啄同時』シナノ印刷.
- 尾形隆彰・池田寛二編, 1989, 『大塩俊介先生 人と業績』千葉大学文学部社会学研究室.
- 奥浩平, 1965, 『青春の墓標』文藝春秋新社.
- 大塩俊介・宮本義孝・竹中和郎, 1961, 『盛り場における青少年の実態』青少年問題研究会.
- 大塩俊介, 1950, 「操作的立場と社会現象の空間的分析」『社会学評論』1(1).
- 大塩俊介・池田寛二, 1978, 「小笠原父島社会の構造上の問題点—予備調査報告—」東京都立大学小笠原研究委員会『小笠原研究年報』2.
- 隅谷三喜男, 2000, 『激動の時代を生きて—社会科学者の回想』岩波書店.
- 鈴木二郎編, 1956, 『都市と村落の社会学的研究』世界書院.
- 高橋和宏・園部雅久・江原由美子・池田寛二・寺田良一・野辺政雄, 1980, 「大都市における社会生活上の居住性(その1)—多摩ニュータウンと共同性・社会関係・社会的地位」『総合都市研究』9.
- 竹内洋, 2001, 『大学という病—東大紛擾と教授群像』中央公論新社.
- 富永健一, 2004, 『戦後日本の社会学—一つの同時代学史』東京大学出版会.
- 富永健一, 2011, 『社会学 わが生涯』ミネルヴァ書房.
- 鳥越皓之, 1997, 『環境社会学の理論と実践—生活環境主義の立場から』東京大学出版会.